



# 小立野小学校

所在地：金沢市小立野4-7-7

電話：076-232-1283

FAX：076-261-2333

HPアドレス：<http://www.kanazawa-city.ed.jp/kodatsuno-e/>

校長名：大畑 勇一

学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援学級	院内学級	合計
児童数	75	85	76	91	94	89	4	10	524
学級数	3	3	3	3	3	3	2	1	21

	校長	教頭	教諭等								養護	事務	校務	他	合計	
			1年	2年	3年	4年	5年	6年	特学	他						
職員数	1	1	3	3	3	3	3	3	3	2	3	1	2	2	2	32

## 1 平成22年度学力向上の取組内容の検証

### (1) 基礎的・基本的な知識・技能の定着に向けた取組

ア 年3回のチャレンジテスト（4月、9月、1月）を継続して実施してきたことで、個々の児童の課題を把握しながら、指導へとつなげることができている。一人一人の児童が目標を持って長期休業の課題に取り組むことで、成果をあげている。チャレンジテストでの基礎的な計算や漢字の習得については、ほとんどの学年で約8割の児童が80%以上の到達率を達成している。

イ 算数科では習熟度別編成の少人数指導を行ってきた。指導の内容や方法、評価について共通理解を図り、指導の改善を行うことができた。また、個別指導などきめ細かな指導を行うことが可能となり、算数の学力は向上している。

### (2) 活用する力の育成に向けた取組

ア 「読解力・言語力」の育成のため、問題解決的な学習を通じて、全教科で図・グラフ・表・写真など様々な資料から児童が意欲的に必要な情報を取り出し、自分で考え、自分の言葉で表現しようとする活動を意図的に取り入れた。このことにより、児童の思考力・判断力・表現力が着実に育ってきている。

イ 社会科では、資料の活用、思考力・判断力を意識した評価問題づくりに継続して取り組んでいる。児童につけたい力を明確にした「問題づくり」→「評価・分析」→「授業改善」へとつなげるPDCAサイクルが定着してきた。児童は評価問題に難しさを感じているようだが、思考したり判断したりする問題には抵抗がなくなり、根拠や考えを記述できる児童も増えてきた。

ウ 「自ら調べ、考え、判断し、確かな思いを築く子どもを育てる」という研究主題のもと、年2回の研究授業を行っている。外部から講師を招聘した研究会を開いたり、学年研究会の充実を図ったりしている。学校研究の深まりとともに教師の授業力も高まっている。

## 2 学力等の現状分析

### (1) 教科別の現状

国語は、文章の構成に関する事項の充実を図るため、内容の理解とともに表現活動を多く取り入れる学習を進めている。特に書くことについては、目的意識をしっかりと持たせながらその書き方を指導することで、個人差はあるものの徐々に定着してきている。

社会は、身近な「人・こと・もの」を教材開発したり、体験活動などを通して具体的な事象から学べるような学習を多く取り入れたことで、児童の学習意欲は高い。また、資料提示を工夫することで、ものごとを多面的に見て、思考したり判断したりする力がついてきている。ノートには、事実だけでなく自分の考えを取り入れて書く力がついてきている。

算数は、算数的な活動を充実させた指導を行ってきた。また、短時間でできるミニプリントに取り組ませることで繰り返しの指導を充実させている。学習で身につけた知識や理解したことを定着させる効果は上がっている。また、量と測定の領域の学習では具体物を使うことで量感をつかむように工夫をしているが、まだ十分とは言えない。

理科は、問題解決的な学習を確実に実施してきたことと、デジタル教材や視聴覚教材を効果的に活用してきたことで知識・理解面だけでなく科学的な思考力も確実に向上している。

## (2) 県基礎学力調査より

4年国語では、漢字の読みと書き取り、ローマ字の読みなどは良好である。しかし、言葉の意味を適切に理解することや段落相互の関係を考え、文章を正しく読むことに課題がある。また、示された条件に即して適切に書くことについては課題が残った。

4年算数は、計算などの基本的な内容は良好である。量と測定領域での身近なかさの量感覚が十分に身につけていなかった。また、測定した量の正味量と容器の関係が読み取れないケースが目立った。さらに、2つの棒グラフを比較して説明をする問題は不十分であった。

6年社会は、ごみを減らしよい環境にするための工夫について記述したり、日本の自動車の海外生産について複数の資料と関連づけて考え、表現したりすることは概ねできている。しかし、地図の縮尺を使って実際の距離を求める問題や石川県の市町の数を答える問題は十分とは言えなかった。

6年理科は、空気中の水蒸気が結露して水滴になることについて説明したり、溶解度のグラフから物質を特定する問題が十分ではなかった。一方、メダカの卵の中の養分の働きについて答えることは良好であった。

## 3 学力向上の取組

### (1) 基礎的・基本的な知識・技能の定着に向けた取組

ア 基本的な計算や漢字の習得のため、朝のめざましタイムでの取組や年3回のチャレンジテストを実施し、児童の定着状況を担任が把握しながら個別指導の充実に継続的に努めている。

イ 算数では、4・5年生で習熟度別編成の少人数指導を行い、指導の内容や方法、評価について共通理解を図り、指導の改善をしながら学力向上を目指す。

### (2) 活用する力の育成に向けた取組

ア 国語の「読むこと」「書くこと」においては、児童が自ら学び、課題を解決していくための学習過程を明確化し、単元を貫く言語活動を位置づけていきたい。そして、段落ごとの平板な読みや無目的な書く活動にならないよう目的を明確にして、読んだり書いたり、目的に応じて内容を的確にとらえたり、適切に書いたり、自分の考えをまとめて交流したりするなど必要な能力を見極めながら育成できるように取り組む。

イ 社会科では、資料の活用、思考力・判断力等の児童につけたい力を明確にした「評価問題づくり」→「評価・分析」→「授業改善」へとつなげることで個々の力を伸ばすことを目指す。

また、地図や統計などの資料の読み取り方の基本をしっかりと指導することで、効果的な資料の活用ができるようにする。

ウ 問題解決的な学習の一層の充実を図る。「自ら調べ、考え、判断し、確かな思いを築く子どもを育てる」の研究主題にしたがって研究授業や全国小学校社会科研究協議会研究大会での授業公開を行い、外部の評価を取り入れることで教師の授業力を高める取組をさらに推進する。

エ 学力向上部会が中心となって「こだつのスタイル」を構築している。授業のスタートの仕方、ノートの書き方、構造的な板書の書き方、学習問題と学習後に持たせたい子どもの思いとの整合性を図るなど様々なスタイルを実践を通して共有していきたい。

## 4 その他の取組

(1) 学校図書館司書が週2回、児童の読書指導や図書館の環境整備等を行うことになり、豊かな読書活動の充実を目指していきたい。また、図書ボランティアによる本の読み聞かせの時間等の活動を活用することで豊かな言語環境の充実を図っている。

(2) 「スポチャレいしかわ」への参加や校内ランニングタイム、なわとびタイムなどの設定を通して体力・気力・集中力を養うようにしていきたい。